

# もど子と人婦

號壹拾第 卷貳拾第



行發會ルベールフ

第拾貳卷第拾壹號目次

新たに考へよ

子供の盗み

『自分が一番よく知つて居る人』

お月様と虫

喬たん

兒童救急手當法

雜錄

神戶通信

寺田精一

岡田みつ

久留島武彦

後藤りん

藤井秀旭

# 婦人と子ども

第十二卷第十一號

## 新たに考へよ

(今日の幼稚園教育不振の主因)

他の教育の進歩、少くも其の活動のめざましさに對して、幼稚園教育の何となく不振にして、おくれたる觀あるは、數へればいろ／＼の理由も事情もあることであらう。しかし、外からの理由、他に訴ふべき不足のかず／＼を措いて、直に之れが第一主因を突けば、責は即ち今日の幼稚園教育そのものにある。新に考へるといふことなく、其の日／＼昨日を繰りかへしてのみ居る傳襲的幼稚園教育にある。

春子は子供が好きであつた。學校を出てから、保姆にでもなつて見ようといふことになつた——別に資格免狀もいらなかつた。私は何も知らないのですがと擢る／＼言つたら、暫くたてば難作もない、直ぐ覺えられると言つて呉れた。實際、保姆なんか誰れにでも出来ること、豫て思つて居た春子はそれで愈々安心した。——幼稚園の先生は面白いものであつた。可愛らしい子供達が先生々と云つて来る。幼児の方からも珍らしい此の新しい若い先生は、すぐ幼稚園中の人氣者になつ

た。春子は宛然花園の中に居る様な心持がした。胡蝶の國に住むような心持がした。遊んで遊んで疲れはする。併し心に何の苦もなかつた。——花園の花には泣くのがあつた。怒るのがあつた。すねるのがあつた。胡蝶がなか／＼惡戯をする。随分と不行儀をする。春子は一寸驚いた。しかし若い先生の教育上の自信ほど強いものはない。此の自信の前には總てのことが易々と解決せられた。一々立派に處置せられた。時にはうまく行かないことがあつても、それは幼児の方に罪があつた。その爲に春子の自信が傷けらるゝ様のことは決してなかつた。——斯くて一年程経た。新しい先生がそう新しい方でもなくなつて來た。大分幼稚園教育の経験が積んだものゝように人からも見られ出した。自分でも亦そう思ひたかつた。處が不思議であつた。甚だ奇妙であつた。花園にもやがかゝつて來た。胡蝶の國が夕闇に包まれて來た。

自信の提灯が消えかゝつて來た。一々のことが危くなつて來た。小さなことが分らなくなつて來た。昨日まで平氣で歩いて居た處が懼しさで一ぱいになつて來た。その爲に一時は立ちすくむ様な思ひがした。併しそうもして居られなかつた。闇の中で幼児等が先生々と呼んで居る。躊躇して居る自分の背を推すように園長がいろ／＼のことを命ずる。どうしていゝのか分らなかつた。きのふまで面白い處であつた幼稚園は苦しい處に變つて仕舞つた。——春子は之れではならぬと思つた。氣をとり直して立ち上つた。そうして先づ第一に自分の苦しさ先輩の同僚に打ちあけた。疑問の條々を擧げて教を乞はうとした。處が誰れも満足と與へて呉れるものはなかつた。しかのみならず、先輩同僚の答へが少からず若い春子を驚かした。即ち若い夏子さんは快活に笑つて、「私そんな六づかしいこと知らないわ」と許り、まるで對手にな

らない。「それよりか、あなたの組の紅子さん、ほんとに可愛い、子ねえ。今日もあの友染を着て来たでしよう。私可愛い、から會集の時あの子ばかり見て居たの。」春子は仕方ないから、「そう」と言つて別れた。そして次に秋子さんに質問をした。秋子さんはいつもの通りの陰氣な顔をして、「あなた大變研究して居らつしやるのねえ。およしなさいよ。私なんかそんなこと考へたこともありません。つまらないんですもの。今日もねえ從順の徳のお話をしてやつてたら大勢あくびをするんですよ。私もねえ今日は氣分が悪くて進まないから、いゝ加減に話して居たんですけれどねえ。それだつてお話を聞きながらあくびするなんて、いくら子供だつて餘りでしょう。だからねえ七人許り立たしてやりました。幼稚園なんてつくゝいやになつて仕舞つた。」春子は流石に何とか言うとした。しかし此の人のヒステリー性は豫て知つて

居るから黙つてやめた。春子は誰れに尋ねても仕方ないと思つて、家に歸つて本を讀んで見た。先づ學校で習つた教育の教科書をあけて見た。幼稚園は獨逸の國のフレーベルといふ人が始めたのだと書いてあつた。恩物といふものを用ふと書いてあつた。そして欄外に自分の鉛筆で毬だの立體だの恩物の種類が記入してあつた。終りに、學齡前の兒童を教育するに甚だ必要な處なりと書いてあつた。春子は失望してそのまゝ本箱の中へ入れて仕舞つた。——とうとう春子は冬先生に質問をして見た。冬先生のお答へは簡單で明瞭であつた。「考へたつて分るものじやありません。私のする通りして居れば慣れますよ。」

この後の春子の歴史は、時が経たといふ他に何の内容もないから略す。たゞ有り難いところには内容のない『時』が三年と過ぎ五年と過ぎて居る間に、春子はいつの間にか熟練な保姆になつた。上手な

保姆になつた。而して嘗て面白い處であつた幼稚園、次に苦しい處であつた幼稚園は、今の春子には苦しい處でも、別段面白い處でもなくなつて、たゞ吞氣な處になつた。

疑問は解かれたのではない。たゞ其のまゝに、いつの間にやら忘られて仕舞つて居たのである。

そして遂には、初から疑問の無いことの様になつて仕舞つて居るのである。即ち意味を知らない形式になつて仕舞つて居るのである。自ら意味を知らないことをさへ氣にしない様になつて仕舞つて居るのである、即ち幼稚園教育方法が器械化せられて仕舞つたのである。之れが即ち今日の幼稚園教育不振の主因である。

意味を知らず、之れを考へない仕事に進歩のあろう筈はない。進歩は兎に角、生命のあろう筈がない。生命のない仕事に眞の成績のあろう筈がない。

い。

此のまゝに形ばかりをどう整へた處で仕方がない。外の事情に基く擴張や、所謂改良や進歩があつた處で仕方がない。要はもう一度考へなほすにある。毎日して居る事を一つ／＼に就て、一つ残らず自分で考へをなして見るにある。何でもなれと思つてして居る方法、何の氣も付ずに用ゐて居る材料一々を意味深く考へて見るにある。考へて解決がつくか否かは先づ第二の問題として、何しろ、先づ考へて見るにある。換言すれば疑を起して見るにある。而して、その疑を堅固に持ち續けるにある。之れが今日の幼稚園教育刷新の第一着手である。

幼稚園教育は簡單なことだといはれて居る。局外者がそう見做す許りでなく、當事者がそう思つて居る。しかし事實果してそうであらうか。いゝ

加減に淺く過して置けば何でも簡單である。綿密に深く究むれば何事でも簡單でない。實際、疑へば分らないこと許りである。考へれば次へくと疑ひが出る。それを疑ひもせず考へもせず、自分のして居る傳襲的、器械的容易さにのみ安んじて居るのは、夢に千里を近しと見るの氣楽さである。疑へ々々。考へよ々々々。そこに今日の幼稚園教育が初めて活きて動き出す。正直に大膽に自分

## 子供の盗み

(フレーベル會十月例會講話)

一  
盗みが子供に於て見らるゝのは、決して珍しいことではない。尤もこれには習癖として現はるゝものと、只一時の現象として起るものとがあつて

に分らないことは何處までも自分で考へよ。即ち器械化せられた今日の幼稚園教育を一旦疑つて見よ。そこに初めて生命ある幼稚園教育が生まれて来る。即ち今日の幼稚園教育の振作に第一着に重要なものは、解決でなくて疑問である。傳襲的幼稚園教育法を吾れ人共に、あらためて考へなほして見ることにある。

文學士 寺田 精 一

其點は普通の成人に於て見らるゝ場合と更に異るところがない。けれども子供は普通の成人とは、其心身の發達の程度及び四圍の關係が色々と相違して居る。従つて普通の成人に於ける盗みと、此

子供に於ける盗みとは多少區別して觀察しなければならぬ。のみならず子供の時期に於て固定した習癖は、成人に至るも容易に矯正することが出来ない。殊に世人より蛇蝎の如くに厭惡さるゝ習慣性窃盗者の中には、此子供の時代に於ける或動機なり境遇なりに因つて、盗みの習癖を得たものが少くないのである。假令また此程度にまで進まなくても、盗みは他人に損害と迷惑を加へ、我身には罪惡であり耻辱である、かくて他よりは擯斥を受け、自らは一身を過つ直接若しくは間接の原因をなすことが少くない。されば子供に於ける盗みは、さして注意すべきものでないと輕々に看過することなく、又有り勝もの現象として樂觀することなく、若しかくの如き場合に接したならば充分に其盗みの原因するところを考察して、それぞれに適應した處置を採らなければならない。而して又此盗みが次に述ぶるが如くに、全く矯正す

ることの出来ないといふものでもなく、又子供の發育に伴つて起り勝ちの場合も多いのであるから此現象が自分の監督の下にある子供に於て發見されたとして甚だしく狼狽する必要もなく、其子供の前途を悲觀すべきものでもないから、彼等の養育者は充分に慎重の態度を以てこれに對しなければならぬ。

## 二

子供に於ける盗みはこれを大別して左の三つにすることが出来る。

一、子供の精神の發達上有り勝ちなるもの。

二、他に特別な動機があつて起るもの。

三、習癖となれるもの。

尤もこれも或特定なる人が、或特定の物品を盗むといふのであるから、盗みをする個人の生來の性質と其盗む物品に依つて大に異なることもあるからこれを一概にいふことは出来ない。即ち同じやう



な境遇にあつても、甲の子供は間々盗みをするのに、乙の子供は更にしないといふこともあらうし又甲の物は何時も盗むけれども、乙の物は更に盗んだことがないといふ場合もあらう。であるから盗みの行はれた場合には、先づ其子供の性質を充分に研究して、更に其盗んだ物品が其子供にはどういふ關係にあるかも一應調査した上でなければ其行為の真相を明白に洞察することが出来ない。子供の盗みを上の如く三つに區別はしたけれども、これで以て必ずしも其全部を包含するとは云へない。大凡一つの現象は場合に依つては極めて單純な形式のものもあるが、多くは色々な事實が關係して初めて出来上つて居るのであつて、此子供の盗みも亦甚だ複雑なもので、其各の場合を拾ひ上げて見たならば、色々な要素が附加されて居つて、上の三つの中の何れに入れてよいかと疑はるゝものもあるに相違ない、只吾人は説明の便

宜から此區別をなしたに過ぎないので、時には此中の一の或場合で説明のさるゝこともあれば、又三つの中の色々な場合が錯雜して起つたものと見てよいこともあるであらう。

### 三

子供の盗みの原因を研究するに先ちて、先づ考へなければならぬのは、子供の所有物に關する考への發達である。即ち盗みといふことは、或人の所有せる物品を、他の或人が侵害するのであるれば所有物といふことの考への如何に依つて、盗みといふことにも色々相違を來して來るのは當然である。然らば子供に於ては所有物といふ考が如何に發達して行くか、尤もこれも其個人の生來の性質と、其四圍にあるものの教育に依つて、大に其發達の速度及び確實性に相違を來すのは當然である。けれどもこれを一般から觀れば次の如き順序を追うて、所有といふ考が發達して行くやう

に思はれる。

一、生後暫時の間は手に觸れたものは、何に依らず口へ持つて行くのである、これはいふまでもなく營養本能に依つて、食物を攝取せんとするものに外ならない、この現象は餘程持續するけれども、極初めに於ては手中にあるものゝ何たるを選ばないのみならず、手にせるものを取上げて、更に關はずに空拳を口にせんとする。されば此時期に於ては、自分の所有して居る物といふやうな考は更でない、只手に觸れたものを口にするといふに過ぎない、従つて手中の物を取られても左程苦痛を感じない、即ち所有の念は未だ見られないといふてよいのである。

二、稍長するに及んでは、手に持つたものを取ると泣き出すといふ時期が来る、此時期に於ては手にして居るもの以外には所有といふことが解らない、従つて眼の前にあるものなどには注意も及

ばないが、取られても何等感情の動搖が起らないかゝる時には一度取上げられた時には、何でも其物でなければ満足が出来ない、多少よいものを與へても容易に満足の態度を示さない、これは實に子供に於ける所有の觀念の萌しである。此時期には只に食ふものに限らない、玩弄物に於ても此念が加つて来る、換言せば何物に拘らず口にしたらといふよりも、物を弄ぶといふ境に達したものである。

三、漸く他人を認め、外界の事物に刺戟されて注意を呼び起すやうになると、今迄のやうに自分のものゝみを守つて居ないで、他人の物に交渉して来る、即ち人の持つて居るものを欲する時期に至るのである、而して一度他人のものを得やうとすると、他のものでは容易に承知しない。此頃からして漸く比較、選擇等の能力が加つて、次第に自分の所有物と他人の所有物とを比較するやうに

なる、若し他人のものが氣に入る時には、何でも  
それでなければ満足が出来ぬのである、即ち此頃  
には自分のものと、他人のものと、區別が更に解  
らないのである。

四、次には人の物を直ぐに取らうとはしないで  
あゝいふものが欲しいといふ望を起すのである、  
即ち前の場合の如くに、見た其物を取らうといふ  
よりは、餘程餘裕が出来たものと觀てよい、換言  
せば人の物と自分の物といふ區別がついて來たの  
である、従つて此場合には見たものよりは、多少  
劣つて居つても貰へばそれで一時の氣が安まる、  
おねたりの多くなるのは此頃から初まるというて  
よい。

五、更に長ずれば、あれは人の物だといはるれ  
ば、それで思ひ切るといふ、所謂聞分けの出来る  
時期になるのである。されども人の物だと云はれ  
なければ、自分のものだから他人のものだからよく區

別が出来ない、即ち他人の所有といふことの考へ  
は、前の時期よりは進んで來たけれども、未だ充  
分でなく、只所有物に對する觀念が稍明になり  
かけたといふに過ぎない。此頃から物品を以て子  
供同士が、遊戯を初めるやうになるのである。

六、けれども玩具其他を以て、子供同士が完全  
に遊戯の出来るのは、自分で考へて見て自分のも  
のであるか、人のものであるかの判斷さるゝに至  
つてから以後のことである。此時期に達すれば、  
特別な刺戟を受けるとか、其他或特別な事情の下  
にあるでなければ、他人のものと自分のものとを  
間違へずに、處理して行くことが出来る、従つて  
玩具の貸借とか、商法の遊戯とかいふことが行は  
れて行くのである。此時期は五六歳より以上でな  
ければ出来ない、尤も其個人の發達の遲速に依つ  
て、其間に大に相違のあるのは當然である。

以上は普通の發達の順序として、所有物に對す

る者の完成されて行く有様を述べたに過ぎない、けれども子供の周囲にある人々に依つて、多少其趣を異にして來ることはあるのである。即ち吾人は大體かくの如き順序を追うて、次第に所有の觀念を得るに至るのである。けれどもこれは所有物として考へるに、比較的容易なるものに就いてのことであつて、複雑なる性質の事物となれば、吾人と雖も何人に屬するかの疑はるゝものの、少なからぬのである、されば吾人は日常社會上に於ける多くの經驗を得て、初めて社會の一員としての所有觀念を得るに至るのであつて、これは相當の年齢に達し、相當の教育を経なければ不可能のことである。

#### 四

却説、吾人が子供の盗みに就きて先づ考へざるべからざることは、子供が尙精神の發達不完全であつて、稍もすると盗みを敢てするといふ場合で

ある。即ち此種の場合は子供が盗みといふことを知らないで行ふのであつて、只成人の眼から客觀的に觀れば盗であるけれども、子供に立ち返つて見れば只普通のことであつて、主觀的には吾人のいふ盗みとは、大に其趣を異にして居る。而して此主觀的に盗みと知らずに盗みをする場合も色々あつて、大要左の數種が其重なるものである。

一、所有權の觀念の明かでない場合。

前に述べたやうに吾人の所有權の觀念は、生れて直ちに有するものではなくて、次第に發達するのであるから、其發達の中途にあつて、此觀念の不確實なることは當然の結果である。かの野蠻未開の人民に於ては、或程度までは所有權の觀念は明かにあるけれども、決して吾人の解するが如き廣義の觀念を有して居るものではない、自分の家とする穴なり小屋なりに置いてあるものは、勿論確實に自分の所有となし、他人も亦それを認める

けれども、それ以外のもので一步を出でて山に入り野に入つたならば、自分の手に依つて取られたものが即ち自分の物となるのみならず他の部落からは、盗んで来るのを名譽の如く考へて居るのである。子供の行爲と蒙昧な人民の行爲とが、其類似して居る點に於て、よく比較されることがある。即ち未開人の所有に關する自由な考へは、恰も子供が手に觸るゝものを以て自分の物と心得ると同じとなし、或は又子供の時に於ては未開人の性向が先づ露骨に現はれる、其結果として未開人などによくある盗み合ひの如き形式が、彼等にも見らるるといふ人もある。兎に角、所有權の觀念の明かでないことが、謀らずも盗みを起こすことは蓋し當然のことである、子供の場合は即ちそれである。

一、何でも自分の自由になると思ふ場合 上述の如く極く幼稚な子供に於て、かくの如きことのあるのは普通のことであつて、眼に見たもの、手

に觸れたもの、何に拘らず欲しいといふ慾望のあるものは、皆自分が得やうとする、又得られるものだと考へる、其爲めに盗みとなることがある。上流の子供などに於て、常に雇人等に世話されて居つて何を弄んでも、何を壊しても更に叱責されるゝことなく、我儘勝手に成長せるものは、相當の年齢に達し、普通であれば一通り所有の考へつくべき時なるに拘らず、何處へ行くも自分の家庭にあるが如くに心得て、欲しいと思ふものを直ちに自分のものとせんとする傾向のあることはよく見らるゝとである。されば、若し其物は自分の自由にしてはならないと宣言さるゝ場合には、甚だ奇怪のごとの如くに感ずるのが常である。

二、他人が現在持つて居つたものであれば、人のものといふことが明かに解かるけれども、若し他人が手を觸れたことを實際に見ない場合には、誰の所有にしても、一向差支のないものゝやうに

思ふことがある。此時期に於ては他人の家といふことが明瞭に理解されて居ないから、路傍の石や草も、近隣の家の庭園の草花でも更に選ぶところはない。友達の家へ遊びに行つても、自分の家のやうな氣になつて、入れ物に入れてある物でも棚などに上げてあるものでも、平氣で取つて食べたりに弄んだりすることは決して珍しくはない。けれども年齢の稍長すると共に、かくの如く器物の内のものや、棚などにあるものには手を着けないで座敷の隅や椽先などに轉つて居るもの位に範圍が狭まつて来る、かくて遂には餘程氣に入つたものでなければ、敢て手を觸れないやうになるのが普通である。

三、所有に關する考の發達と共に、自分の家と他人の家といふ考が次第に發達して来る。元來家といふことは、相當の知識が備はらなければ解らないものであるから、極幼少の子供に自分の家

と他人の家との區別の立たないのは、決して無理からぬことである。要するに子供は其四圍の例へば庭の具合、室の様子などを解するに至るのは、可成知識を得てからのことである、即ち子供はそれ等のことよりも、先づ自分の周邊にある家族の人々の容貌なり聲なりを覺えて、それ等の人々が自分の周邊にさへ居れば、何處に居やうと一向頓着するところはないのである、けれども漸々知識の範圍が廣まつて行くと、自分の家の様子などを理解して、遂には他の場所に居ると、一種の不安の念を伴つて落ち付かないやうになる、然しそれも度々行く家であると、矢張親密の感が加つて、更に不安の念の加はらないのが常で、此點は普通の成人以上に極端に現はれるのである。かくて自分のよく行く家の物品は、何れも自分の家のものと區別が附かない、従つて間々氣に入つたものに接すると、恰も自分の家のものを、皆自分の

ものゝ如くに心得て持ち出すやうに、平然として携へ來ることなどは珍しくはない。かくの如き傾向は、他に或特別なる條件の加はらない限り、年齢の長すると共に消失して、自分の家と人の家とを容易に區別して、他人の家の物品などを自由にしないやうになるのである。

四、自分のものと定められたるものと、否らざるものとの區別。これも前の三の場合と同じく、初めには更に區別が出來ない、而してこれは相當の年齢に達して、自分の家と他人の家との區別が理解されるやうになつても、尙此自分の物品と自分の家族の人々の物品との區別が出來ぬといふ場合が多い。即ち他人の家のものには手を觸れないけれども、自分の家の物であれば何でも自分の自由になるものと考へて、往々にして父母兄弟の物を持ち出して友に與へ、又は弄び壞して更に氣に掛けない場合がある。かくの如き時期には人のもの

のをも自由にする代りに、自分に與へられたものにも頗る冷淡であつて、少しにても自分の氣に添はぬことがあると、打ち捨てたり人に與へたりすることがある。けれども次第に此自分に與へられたものと、否らざるものとの區別が出來るやうになると、他人のものを侵害しないと共に、自分の物品を守ることも甚だ嚴重になつて來る。かくて物品の取り合ひの喧嘩が此時分から起つて、その爲めに兄弟同志、又は友達同士で争ひを初めることもあるのである。

五、更に進んで自分の所有といふ觀念が愈明白になると、今度は成るべく其物を侵されまいと努むる結果、隠すといふことが加はつて來る。尤もかくの如き現象は、動物一般にある一種の自衛本能の現はれであつて、かの犬や猫が人から食物を與へられた時に、假令それを奪ひ取るべき敵も居ないのに、それを咬へて木の蔭や椽の下に入つ

で、靜に食べるといふに類して居る。殊に自分が明かに人から與へたと告げられなかつたものを手にした時には、一面に自分の所有といふことが不確實であるやうに思へるから、事に依れば取り上げられるかも知れないといふ不安の念が加はつて尙更それを隠さんと努めるのである。茲に至ると正確なる所有の觀念に對する良心が既に萌して居るのであつて、その良心の懷疑に依る不安を忍んでも得んとするのであるから、今迄の無邪氣な盜みと多少赴を異にしたものといふてよい、従つて此時期に於ける盜みは大に警戒をしなければ、後來思はざる不幸を招く恐れがあるものと云はねばならない。

以上は何れも子供が充分に所有の觀念の得られないで、稍ともすれば盜みに陥るべき恐ある場合を述べたのである。次に

## 二、自我擴張の慾望。

生物は其何たるを問はず、常に自己の擴張を欲求して居る、自分の勢力範圍を成るべく廣くしたいといふのは、實に生物一般の通性である。吾人々類に於ては、既に其子供の時分より他の干渉を喜ばず、出來る丈けは自分で勝手にやつて行きたいといふ希望を有して居る。此自我の發展を望め、他人の干渉を好まぬといふことの他面の表現は、即ち及ぶ限り自分の我儘を振り回したいといふことである。これは敢て子供に於てのみではない、一般の成人に於ても明かに見られることであるが成人は他の種々なる關係より露骨に現はれない場合が多い、然るに子供に於ては是等の欲求の表現が極めて赤裸々に出て居る、従つて一々それが日常の彼等の行爲に現はれるのである。

子供は他の小動物などに對して、全く專制君主の如き態度を以てすると共に、目に見るもの、手に觸るゝもの皆自分の思ふまゝに取扱つて見たい



のである。換言せば何處にあるものでも、自分が欲しいと思へば自分の懷へ入れて置きたい、食べたいものを見れば、食べてしまいたい、人に與へなければ、人にも與へたいといふやうに、自分の周邊に現はれるものを、一々自分の自由の心で處理して行きたいのである。それが出来ないのは、彼等にとつて著しい苦痛である。且つ又自我の發展の欲求は、所有といふことに就いては、成るべく多くのものを所有して、自分の物として見たいといふ方面に進んで行く、その爲めに欲しいと思つたものは、何れも自分の所有物としたいといふ願望を起して来る。殊に子供は知識經驗も狭小であり、一時の感情にも支配され易いものであるから、彼等の心は其刹那刹那に起る心の動搖につれて全體の心が落ち付きを失つて、現在自分の欲して居る物品が、何人に屬すべきものであるか、又子供等の手にすべきものにあらざるか等のことを、

判斷する力もなければ、其餘裕をも有して居ない此關係からして子供の有する自我擴張の念は、往々にして普通の成人以上に盲目的となり易く、從つて其結果は思はざる盜みに至ることあるも自然である。所謂子供が欲しいといふものに對してはそれが人の物であるとか、危険なものであるとかいふても更に聞き入れず、何處までもそれを得なければ満足しないといふのは、即ち此自分の思ふまゝを通そうといふ念に驅られて居るに外ならない、それを他より干渉して曲げさせやうとするから、容易に聞き分けないのである。

### 三、子供の蒐集本能。

本能として子供の時分から現はるゝ色々な精神作用の中に物を蒐集する一つの現象がある。かくの如きことは伴して人類に於てのみ見らるゝものでなくて、下等の動物に於ても、或種のものにはこれが明かに行はれて居るものが少なくない。例へ

ば蟻の如き、蜜蜂の如き、各其食餌とすべきものを各方より採り來つて、或一定の場所に集むることを仕事として居る、其他穴居の獸類、巢を作る鳥類などは大抵此種的作用を有して居るものである。これは畢竟生活持續の必要から起つたものであつて、それが子供の時に何等の着色もなく、表現したのに相違ないのである。

子供に此本能のあることは、彼等を暫時屋外に自由に遊ばしめて置く時は、彼等の懷や袖は往々にして、小石、木片、草葉其他のもので満ちて居るにても知られる、又彼等の玩具箱を検すれば、大抵は何等の統一も秩序もなく、雑多なものが投げ込まれて居るのに心づくのである、これ何れも彼等の蒐集本能に依つてなされた結果に外ならないのである。而して彼等が此行爲をなすは所謂本能的行爲であつて、普通に吾人が生れながらに、乳房を吸ふことを知ると同じく、そのこと以外に

別に深い意味や目的を自覺して決して行ふものではない、只そういふ欲求が自然にあるから行はれるのに過ぎない。尤も多くのものを蒐集する其瞬間瞬間には、幾分か奇麗だとか、何にかそれにしてする目的があるとかいふことも加はつて行はるゝ場合のあるは勿論であるか、大抵はかゝる時の行爲は何等特別な目的もなく、殆んど無意識的に行はるゝことが甚だ多い、従つて後になつて其集めたものに就いて、何の爲めに持つて來たかを尋ねても、一向に其要領を得ない場合が甚だ多いのである。かくの如き精神現象の存在は、往々にして子供に、無意識的の盗みを敢てせしむることがある、殊に多數の子供同志が、お互に玩具などを取り散らして遊んで居る時や、人の家へ行つて遊んで居る時などに、何心なく其處にあつた物品を自分の懷や袖に取り入れて、平然と自分の家へ歸つて來ることなどがある。それが自分の家の人に

見附けられて問ひ糺されると、初めて何處より持ち來つたことを自白し、時に依つてはそれすらも思ひ出せざる場合も少なくないのである。かゝることは比較的幼少なる子供に於て、普通に見らる現象である。

以上述べたところは、年齢の極若い子供に於て特に普通に現はるゝことであるが、更に稍年齢の長じたるものに於ても、尙其知識経験の狭小なる爲めに、思はず知らず盗みをするといふことが間々あるのである。

四、人には自然に誰でも同等であるといふやうな考がある。尤も人の本性を考察し、一種の人生観より出でたといふ程のものでは勿論なく、只何となく人は誰でも同じやうにあるものといふ考が、生れながらにはある。けれどもそれは次第に四圍の人々よりの教育なり、又自分の觀察なりに依つて、漸く自己の位置を知り、自己の取るべき

ところを察するに至るのは當然である。かの子供が自分の家の貧しいことは理解されないうで、富に生活して居る家の子供を見て、自分等も當然のやうにして貰へるものといふ考を抱いて、其父兄の心を痛ましむることも少なくないのである。

此時期の子供には、少くも自分と他人とを比較する丈の能力の備つて居ることは明かなことであるから、相應に年齢も長じ、自分一人で自由の出来る位になつた頃のものである、されば今迄の如く極幼稚なものと異つて、多少自分でも覺束ながらに子供相應の目的を立て、自分の慾望を遂行せんとする努力もあるのである。従つて相應の生計をなせる家の子供等が何か面白い玩具や、甘うな食物などを持つて居る場合には、自分も家で貰へることと思つて、家の人に要求すると與へられない、そこでそれ等の物を得る手段などは選ばず、又買ふといふことも知らずに、只自分も當然

得らるべきものといふ念に驅られて、遂に盗みを敢てすることがある。かゝる時には他の子供が貰へて、自分のみが貰へぬといふことが理解されないのである、されば自分の家は貧乏だから與へられぬといはれても、更に子供には説明にもならず増して満足などは與へられぬ。反つて懷疑の念に入らしめ苦しみに陥るゝに過ぎないのである。故に生計状態の懸隔せる家庭の子供同士を、一所に友として遊ばしむるは、貧しい家の子供に可哀相であると共に、時に依つては盗みを起さしむる間接の原因たることもあるのである。

### 五、好奇心。

人には一般に好奇心がある。殊に子供に於ては知識が甚だ幼稚であつて、外部に對する経験が極めて少ないから、日々彼等の経験として接觸するものは何に依らず珍らしいので、其珍らしいものを捕へて理解したいのである、そこで子供には極め

て疑問の多い時期が到來する、見るもの聞くものに附けて疑問を發して理解しやうと努める。かくて彼等には注意を惹くものが甚だ多い、而して或一つの物に注意すると、其注意の度の強きだけ、他のことは殆んど全く忘却され、只其物のみに心が奪はるゝやうな状態になり易い、かゝる時には他の色々な考や判斷などの入る餘裕がない、されば子供が何か或物に注意すると全く夢中となるのであるが、其注意の移動は好奇心に依つて支配されて居ることが極めて多い。

かくの如くに子供には、普通の成人以上に目新しいものの、物珍らしいものが多く、彼等の好奇心を挑發するものに接する機會に富んで居るのみならずそれに動かされることも甚だ容易であるから其結果思はざる盗みをすることも少なくない。尤もこれには何事に依らず人の持つて居るものはよいものゝやうに思はれるといふことが加はつて、

現在自分が所有して居るものゝあるに拘らず、それを捨てゝ人のものに眼をつけて欲しく思ふといふ、子供に有り勝ちの慾望が、中々強く働くが故に、友達のものや、人の家にあつたものを持ち出すといふが如きことも、稀有のことではない。

## 六、道德的觀念の不完全。

人は生れながらにして性の善なるものか、將惡なるものかの論は別問題として、兎に角人が家庭の人から次第に家庭外の色々な人々に接するやうになるまでには、人と人との關係から生じて來る様々なことがある。それは何れも相當の人に言ひ聞かされるか、若しくは自ら經驗した上で推察しなければ、滞りなく行ふことは六ヶしい。これ寧ろ當然のことである。されば經驗の少ない子供に於て、人と人との關係を圓滿に平和にやり遂げることの到底不可能のことたるは言を待たない。況んや人といふことは勿論、自分といふことさへも明

かに理解されない幼少の子供に於て、人並の道德的觀念の期待される道理がない。

いふまでもなく子供には、人としての美はしい可愛い心の萌しはある、けれども彼等に於てはそれが普通の成人よりも刹那刹那の心の動きで左右さるゝことが多い。殊に所有といふ考の未だ確立しない時分には、人のものを取つてはならぬといふ心よりも、先づ現在の自分の欲求が満足さしたといふ念に驅られて動くのである、さればかゝる時にはこれを取つてあの子が可哀相だといふやうな考は第二に起つて來るものである。まして人の手に持つて居ないものであれば、假令それが友達の前にあらうが、人の家の座敷にあるものであらうが、欲しいと思へば持つて來て一向に差支のないやうに思つて居る。けれども稍長じて來れば自分のものを失つた場合のことや、人に取られた時のことなどを考へ、又自分のものと定められぬ

ものに、自分の手を觸れるのはよくないと人にも教へられて、それを解するやうになれば、自ら道徳上の觀念も餘程發達しかけたのであつて、特別に心を刺戟したやうなものでなければ、敢て盗みなどをしないやうになるのが普通である。而して此種の比較的に簡單な道徳上の觀念は自然に開發する、ものではあるが、彼等の周邊の人の教に依つて、少くも其發達を早むことは今更いふまでもないことである。

これまで述べたところは、子供の精神發達が甚だ不充分であつて、其爲めに稍ともすれば思はざる盗みを敢てする場合の概要である、然れども初めにもいふた如くに、精神の發達は其先天性に依つて遲速の差があるのみでなく、其個性にも相違があり、且つ彼等を取り圍んで居る人々の態度に依つて大に支配するものであるから、凡そ幾歳までが主にかくの如き状態にあるかは一概には云

はれないけれども、學齡期に達する以前の子供の多くに於ては、此種のことより往々盗みをする場合があるやうに思はれるのである。勿論其以後に於ても是等の條件の加はることは當然であるけれども、此以後のものに於ては、次第に家庭外の多くの人にも接し、多少社會的の經驗も得るゝのであるから、此時期に於て見られない色々な條件や、又精神上的の變化も伴ふ故に、尙更に複雑な關係に於て盗みの説明がされなければならぬ、即ち今迄は殆んど彼等の自己が中心であつたけれども、此以後のものは、自己以外のものが加はる機会に富んで來るのである。(以下次號)

露の玉つまんで見たる童かな (一茶)

明月をとつてくれるとなく子かな (同)

## 『自分が一番よく知つて居る人』(二)

Mrs. F. H. Burnett. "The one I know the best of all."

東京女子高等師範學校教授 岡 田 み つ

六、始めての本。

書物を相手に育つた人間には、自分の初めて持つた書物といふものに懐しきを感じるものであるが、小さい人には「花の本」といふのが初めての本であつた。實際は「いろは」を教へる爲の本なのであつたが、此本ほどに御話が入つて居て、先が氣遣はれて、而して美しく、何ともいへぬ魔力のある本は無かつた。其本がもう奇麗で！腰掛に坐つて何時間でもページを繰つては、「り」は林檎の「り」、「な」は撫子の「な」、「す」はすみれの「す」といふのを見ては其美に打たれ、其不可思議に感動したものである。それが横長い本で、活字

が大きく明瞭で、而して一ページが上下二段に區劃が附いてゐて、上段は長方形の黒地でそこに花の畫がある、下の段には其花の名の頭字で始まつてゐる四行の歌が書いてあつた。その黒い地がよい思ひ付きで花が非常に美しく見えた。その歌の文句は記憶がないが、何でもそれ／＼花に縁のある教へ草が書いてあつたと思はれる。小さい人が幼い時分には、修身といふ事は忽にされなかつたもので、方正の人は墨業には必らず華美／＼しいといふ前置きをし、輩には謹しみ深といふ意味を添へ、薔薇には香氣の美しいといふ事を決して忘れずに附けた。小さい人は、花の諸徳を忘み嫌ふ

念は毛頭なくて、花はさうしたものと觀念してゐたものゝ、黒地に華やかに出てゐる花の畫そのものゝ方をどんなにか好きであつた。花の本が現はれて以來、小さい人は本を所有してそれを讀みたいとの願ひが心に萌した。幸にも小さい人には理想的の好祖母があつた。此祖母さまは欲しいといふものを下すつて、而して思ひやりがあるので物ねだりをするのに都合がよかつた。小さい人が本を欲しがるのが祖母様には面白くも亦不思議でもあつたのであらう、本よりも人形の方がよくはないかと仰つたのだが、小さい人は本でなければ満足が出来ぬと頑として言ひ張つた。そこで小さい人は本屋へ連れられていつた。田舎路めいた處にある店であつたが、小さい人は戸外に待たされて居たのであらう、店の内部の事は記憶になくて飾り窓の玩具やガラス瓶の中の菓子的事を覺えてゐる。この店で花の本を購つてもらつて、小さい

人は其を自分の腕に抱へて歸つたに相違ないが、さてその本は其後何處へどう紛失つてしまつたやら分らぬ。

#### 七、御話と人形

小さい人は御話をあんまり語り聞かされなかつた方で、乳母から何とかして御話の委しいところを聞きたいと、無性に骨を折つたことを覺えてゐる。その乳母が面白味のない人間で、其茫然した愚鈍な顔を見ると、よく自然に思つたものだ。意味のあり氣な唄を乳母は二行位しか知らないくせに、その續きを知らうともせず、又その話の筋を探り出さうともしないやうな人故、いくら小さい人がその膝に凭れて、その澄した顔を眺め入つて、くどく尋ねても委しい事を引出すことが出来なかつた。

その歌はとぎれてゐたのだが非常に意味が深く思はれて、



君知らずやアリスをば  
光澤ある髪の色なる

やさしのアリスを知らずとや

と節哀れに歌はれると、茶褐色の髪をしてゐる可憐の少女が目前にうかぶ。そのアリスを何故だか人が哀れがつて而して男の子供が山麓の學校へゆくやうな意味の處があつて、その先に

小暗き蔭に唯一人

御歌の石のそ下に

やさしのアリスは眠るなり

といふ句があつた。その意味が悟れるやうになつてからは、聞くごとに胸が張り裂けるやうに哀れに思はれて、

「何故アリスはそんな處に居るの。どうして石の下に居るの。」と尋ねると、

「死んだから其處に埋られたので御座いませう。と乳母は卒氣なくいふ。

「やさしのアリスが？髪の色のアリスが？何故死んだの？何だつて死んだの？

「存じませんヨ。

「でもその先を聞かせておくれ。もつと歌つてごらんよ。

「もう存じませんの。

「その學校の先生はそれからどうしたの？

「どうしましたか歌に入つて居りませんもの。

「その先生ツて恐いの？

「其も歌に何とも御座いませんヨ。

「やさしのアリスはその先生の學校へいつたの？

「そうで御座いませうヨ。

「アリスが死んだ時に先生は可哀さうだと思つたかネー

「其も歌に御座いません。

「そのあとの文句はないの？

「覚えて居りません。

問ひ尋ねても無益であつた。乳母は其以上は知らず又知らうともせぬ。かうか、あゝかといろゝ糸口を引出さうとしても、乳母は想像力がないから仕様がな、小さい人はもの欲しさうな眼で、乳母の愚かしい顔を打守るのみであつた。乳母の方にとつては、小さい人が途切れた歌を繰りかへし歌へ／＼とせがんで歌はせて、その末にきつと新奇の質問をもち出すので、さぞ迷惑に思つたらうと想像される。

其から人形であるが、小さい人にはお伽噺や、小説や、悲劇や冒險談などで想像力が盛に刺戟を受けるやうになつて、始めて人形が此上もない面白いものとして現はれたのである。小さい人にとつては、人形は人形でなく、出来事の主人公なのであつた。妹たちが人形を飾つて玩具の御茶道具で飯事をして、訪問をしたりされたりして遊んでゐると、小さな人は恐ろしい話を小聲で語りな

から人形と一所にそれを演ずるのであつた。而して自分は種々の役をするが主人公は人形が必ず出勤めるので、或は英雄となり、悪漢となり、或は泣き崩れたる女官となり、慈仁なる老紳士となつた。而して臺詞は他人の聴くことを恐れて聲低くのべるのであつた。他の人は小さい人が獨語つ癖があるとして、可笑しがつて、下女などは戸の蔭に立ち聞きしてクス／＼笑ふし、兄達は愚かしい奴位に思つてゐた。

宅の玄關へ入つた處に階段があつて、其の側に背の高い燭臺が立つてゐたが、或る日小さい人の母親が何氣なく階段を下りて來ると、小さい人が怒り猛つて何事を言ひながら、玩具の鞭を上げて、丁々と眞黒のゴム人形を打擲して居た。而してその人形は燭臺の足に縛り付けてあつた。

「マ／＼何をしてゐるの。」と母親は驚いて云ふと、小さい人は飛びすさつて、鞭を振つて居た腕

を下ろして。骨折りで顔は既に眞紅になつてゐたのであるが、極り悪るさに更にも赤くなりさうであつた。

「唯遊んでゐるの。」と口籠ると

「遊んでゐるの？何をしてゐる處なの？」

小さい人は首を垂れて甚く恥らつた風情で、

「唯ネ、ある事の眞似をしてゐるの。」と答へた。

小さい人が人形を捨てる年頃になつて、母親が此事を語り出すと、あの時は「トム叔父さん」といふ小説の中で、トムといふ黒奴がレグリーといふ邪慳の主人に打擲される處をしてゐたのであると打明けて語つた。

子供部屋にある緑色の長椅子こそ、小さい人の唯一の道具立て見かけは古びたゴツ／＼した坐りたくも思はれない椅子であつて兩端に肘掛が付いてゐたのであるが、其肘掛が立所にして磨墨ともいふべき軍馬になり、又雪を欺く駒ともなり、跳

り狂ふこともあれば、蹄が砂を蹴つて飛ぶ事にもなつた。家の内の薄暗い廊下は度々牢獄となつて其處で貴人が囚はれるの不遇を贏ち、臺所が饗宴の席となつて、山海の珍味が盛つてある卓を圍んで古風の文句で主客が打ち興じたりする事になつた又居間にあるテーブルには床まで下がる程の長いテーブル掛が掛けてあつて、その下へ潜ると世間から全く離れてしまふので、屢々此處で人形を相手に自分の創造した別天地に住んでゐたのである後年になつてこそ、小さい人は大人がその部屋に入つて來て、テーブル掛の下蔭で何か小聲でヒソ／＼言つてゐるのを聞いて、何と思つたことだらうと考へたが、當時は全く夢中で人の來往になか殆んど心付かなかつたのである。

#### 八、不可思議の事。

誰でも子供の時の事を回顧すると友達であつた子供の中で、何か特徴のあつた子供だけがはつき

りと記憶に残つて居るものである。小さい人の心にはある男児の事が深く印象した居た。その子は伶俐でもなく、可愛氣もなかつたが、氣の小さい柔順しい、自然優しくしてやりたくなるやうな性の子であつた。可弱さうな子だと人が評をしてゐたが、小さい人には可弱いといふ事の意味が分らぬので、妙で而して悲し氣なといふ心持にとつてゐた。その子は細つこい、目に立たぬ子で、丸ぼちやの紅頬の子供達の中では、殊に頬や唇の紫色をしてゐるのか際立つて見えた。

「アルフヒーの唇は變な色ネ。」

「妙ネ！ 頬も青い。」

などと語り合つた。すると物知り振つた子が、「心臟が悪いのですつて！ 先生がさう仰つたの。」

急に死ぬかも知れないのですつて。」といふ。さうすると誰かが急死する人の話を爲出して、聞いてゐる一同は恐氣が差して來た。併し自分等はま

さか死ぬとは思はなかつた。死ぬのは老人が猩紅熱に罹つた人なので、子供部室だの學校だのに死ぬなんといふ事が起れば、あんまり不似合であると思つた。

小さい人は、青い唇の子が、死ぬかも知れぬと云ふ事をよく／＼考へて見て妙な氣になつて、何故とも云はずに、その子に石筆の新しいのを與へた。而して先方が見てゐぬ時に、課業の事も忘れてその子を眺めてゐた。

或朝仲間の一人が、

「アルフヒーの事を聞いて？」といふ。

「イーエ、アルフヒーがどうしたの？」

「死んだの！ 昨日學校へ來なかつたでせう。而して今朝死んだのですつて。」

死といふ妙なものが、教室へ入り込んで來たのである。而してアルフヒーの處へ來たのである。あの平凡な顔をしたあの子の處へ來たのだ。しかし

アルフヒーは繊細で人と異つてゐたからなので、まさの他の子の處へは來はしまいと思つた。年嵩の生徒等はずと委しい事が知りたくて、どういふ風に死んだか、何か言つて死んだか、御話の本には小年小女が教へになる事を遺言して死ぬからアルフヒーは如何であつたかしらむといつてゐた誰も委しくは知らないのていくら話合つて見ても分らぬ事はやはり分らぬので、仕舞に、アルフヒーの宅へいつて遇はせてもらふやうに頼まうと子供の中の實際家が言ひ出した。小さい人は恐れた。行つては悪かろう。家人が遇はせたくなく思ふかもしれないと言つては見たが結局は行つたのである。

小さな、陰氣な裝飾のない、もの淋しい室の内に、壁に近く長椅子があつて、其上に白布の被つてゐるものがあつた。それが見に来たものであつた。四邊の氣色があの身にそはぬ着物を着た、美

しい處のない、蒼白い顔をしたあの子に相應してゐるやうや心地がした。傍に居つた人が白布を取り除いてくれたので、小さい人は始めて死といふ不可思議のものに接した。連れの小女が其に觸れて見よと囁いた。他の子が皆手を出して觸れたから其が禮儀かも知れないが、小さい人は恐ろしくて出來なかつた。しかし「死の如く冷い」といふ文句をよく聞いてゐるので、どんなものか經驗したくもあつて、終に手を伸してその頬に觸れた。思つた程に冷やかではなかつた。しかし氷や雪の冷たさとも亦違つて、柔味のある冷たさで、しかも永劫晴まる時期の來ない冷たさだと思つた。而してその部室を出たあとには柔味のある冷たさといふ感覺と、不可思議を見たとの念とが残つてゐた。さて不可思議を自分は見た。友達も見た。その硬直を眺めその寒冷にも接した。不可思議は自分達の真中へ入つて來たが、自分等には來ぬものと

思つた。誰も口へ出してさうは言はなかつたが、  
確にそれと信じて安心してゐた。

## 九、婚禮。

年若の婦人といふものは、奇妙な偉らしいものと  
子供心には見えた。奇麗な衣裳に、花や何かで飾  
つてある帽子を被つて、時計や鎖をつけて教會へ  
出掛けたり、舞踏會へいつたりする。その舞踏會  
といふものが、どんなものか知らぬが、立派な華  
やかな會で、男の人が薄衣を着た婦人とダンスを  
したり、實のある、上品な光り輝くやうな御話を  
するものらしかつた。

小さい人の通つてゐた學校の先生は、二人とも  
年若の婦人であつたが、誰も若い人だなど、思は  
なかつた。權威、智識、經驗の權化たる先生を、  
どうして取るにも足らぬ若年輩と混同する事が出  
來やう。一人の先生は年齢二十三でもう一人が二  
十四才で、いもあつたろうが、自分等の母親位の年

輩の人と思つてゐた。或る日小女等が先生の年齢  
についてあれこれと話してゐた處を、先生が聞いて、

「私をいくつだと思ひますか」と目に笑を帯びて  
傍の小女に尋ねた。小さい人は不圖、うちの母様  
よりは若いかも知れぬとの念を起こした。しかし  
尋ねられた生徒は、

「さうネ、知りませんけれど……まあ……さうネ  
四十位」といつた。

この先生の御友達か所謂若婦人であるのが不思議  
で、この人達は茶話會の席で談話をするのに「英  
國の最初の王は誰ですか」とか「ツラル山は何處に  
ありますか」とか「マクレスフィールドは何で有名  
ですか」などと云ふだらうか。まさかとは思ふが、  
さて他に談話の材料はありそうにも見えなかつた  
ところが、或時小さい人は、先生が舞踏會に着る  
のだといふ薄桃色の着物を見せてもらつて大に悟

つた。仲善の友達が先生の妹だつたので、その子  
が云ふには、

「アノネ明き部室に薄桃色の着物が出してある  
の。夜會は今夜なのでもう着るばかりになつて  
ゐるの。姉様があなたに見せてもよいと仰ると  
いゝが。」

四十位と思はれた先生がその姉さんなので、着物  
を見ても可いとの許可がその人から出た。明き部  
室へゆくと、二つ薄桃色の着物があつてフハ／＼  
した飾が付いてゐて、華麗きはまるものであつた  
こんな着物を着て、男の人とダンスをしながら「五  
十七から十五を減じていくつになりますか」など  
いはれるものか。決していはれはせぬと知つた。  
この先生達の從姉妹が二人同時に結婚式を擧げ  
るといふので、その噂が學校内に立つと、一同大  
層面白い事に思つた。小女には一人として婚禮の  
式に列したものが無いので、儀式についてゐ、だ

かうだとヒソ／＼語り合つたが、先生もやかまし  
く咎めもなさらなかつた。何でも若い女の人が、  
特に美しい白き着物を着て、蜜柑の花をかざして  
白いベールをして、男の人に伴はれるものゝ由で  
あつた。御嫁さんは美しいのと尋ねる人は多いが  
花髻に對しては誰も興味を持たなかつた。誰小  
い人は花髻を不思議の人物と興がつて、小説中の  
人物をあてはめて想像をしてゐた。

婚禮の當日は先生が二人とも花嫁の附添になる  
ので、學校は休業であつた。小さい人も友達と一  
所に教會へその式を見に出かけていつた。關係者  
の馬車が来るまでは、誰も教會の中へ入ろうとも  
せぬので、小さい人も戸外に待つてゐる。而して  
待つた／＼末にやつと鐘が鳴り初めた。大きく、  
快く、勇ましく心が酔はされるやうな音で鳴る  
ので、思はず鐘樓を見上げると、青空が目に入つ  
た。まあ何といふみどり深い空だらう！あの白い

雲のフワ／＼してゐること！日の當る御嫁さんは幸福だといふが、幸福でない御嫁さんがあらうか！

馬車がやつて來た。人々は見たがつて大骨折をしてゐた。小さい人には白い衣ものと、花と、あでやかな色彩と、黒き衣物とだけが目に映じた。

教會の中へ曳かれて入つたか、押されて入つたか覺えもなく、小さい人はいつの間にか高い腰掛にかけてゐた。式は始まつた。しかし細かい點は分らなかつた。何でもフ／＼した白衣、垂れてゐるベール、花などが祭壇の前に集まると、牧師が恐ろしげな事をいつて誡めてゐるらしかつた。

それもやがて濟むと、その一群は別室に退いたすると會衆の中が急に騒然となつて、小さい人は又押されて、曳かれて外へ出て、嬉しさうな鐘の音を耳にした。戸外もなかく賑はしくて、巡查が見物人を制する程であつた。待つてゐた馬車には

再び白衣、ベール、花、黒衣、天鵝絨、繻子がそれ／＼乗り込んで去つてしまつた。鐘はますますやかましく鳴りといろき、日光はなほ／＼キラキラ照つて、四邊が唯々美しくあつた。

### 柿

師の坊は山へ童子は柿の木へ

漣いとこ母が喰ひけり山の柿

京の兒柿の漣さをかくしけり

### 菊

小ぶりなほ小僧が鉢や菊の花

鉢の柄に小僧の名あり菊の花

(同)  
(同)



# お月様と虫

ニ調

$\frac{4}{4}$  1 1 3 5 5 | 6 6・5 0 | 6 5 3 1 | 3 2 2 0 |

チツキサマ マルク オヤネナ デレバ  
そのいはの うらで そのつゆ すうて

1. 3 5 5 | 6. 5 i0 || : i. 6 5 1 | 3. 2 10. ||

クサパニ ツユガ キラキラ ヒカル  
かはいい むしが うたうよ うたう

## お月様と虫

久留島武彦

先月の始め、まだ中秋の夜の空の美しい頃、久留島早蕨幼稚園長から、斯ういふ唱歌が出来たからとて編者へ送つて下さつたのが左の一曲であります。季節おくれで折角のお歌に對して却つて如何かと思ひましたけれど、先月はもう十月號の印刷中でありますし、來年の秋までは待てないし、そこで今月號へ載せさせていたゞくことにしました。(編者)

### 一、お月様まるく

草葉に露が

お家根を出れば  
キラ／＼光る

キラ／＼光る

### 二、その葉のかげで

可愛い、蟲が

その露吸うて  
うたふよ歌を

うたふよ歌を

### 三、あれ／＼うたふ

お月様までも

皆聲たて、

といけと高く

といけと高く

○遊戯

お月様になる兒

一人

お家根になる兒

數人

立ちて肩をくませて、その兒等の數により

五軒、七軒といふ

草になる兒

數人

兩手をのばし、指をひろげ、草の葉のかさ

なりたる心もちにてかゝむ

露のときには指さきを動かす

蟲になる兒

數人

松蟲、鈴蟲、くつは蟲等子供等の知つて居

るといふものを好みによりて選ばせ、これ

等の蟲は皆面を伏せて草の葉の下にかゝみ

込む

皆が第一節をうたふにつれてお月様になつた子

供は兩手の指でお月様をこしらえ、次第にお家

根のうしろからお家根の上にさしのぼす。(若し

之を遊ぶ幼稚園が田舎か海邊ならば、その土地の實際につれて言葉「お家根を」を「海から」「原から」「山から」といふ風に更め、遊戯も之れに適ふ様に更める事申す迄もなし)

次に「草葉に露がキラ／＼で草になつた子供は指さきを動かし、第二節に入つて蟲になつた兒等はそろ／＼動き出して歌ふ心構へになり、第二節終るや、それ／＼自分のなつた蟲のなき聲(松蟲になつた兒はリーン／＼、鈴蟲になつた兒はチン、チンチロリン。がちや／＼になつた兒はガチャ／＼ガチャ／＼の類)を順次に單獨で歌ふ。

そこで子供等は第三節を歌つてしまふと、蟲になつた子供等は、各自なるべく調子よく、各自の鳴音を合奏して、おしまひになる。

# 喬 た ん

雙葉幼稚園 後 藤 り ん

喬たんの入園したのは、この四月のことで恰度満三才の時でした。兄さんは茂さんと言つて満四才と六ヶ月です。此小さい兄弟は性質から風采凡ての點に於て曾我兄弟の五郎十郎を聯想させます。家庭の躰け方が宜いと思えて、兩人共にまことに小供らしく爛漫として居る。兄さんは世に云ふ總領の甚六風でなく、沈着伶俐である。弟は未だ何んにも分別せぬ無茶坊さんであるが、それ却々面白く快男幼児なのです。兩人全然性質は反對ですが兄弟仲は至て睦しく、入園當時より今に至るまで兄さんの側で許り遊びで居ます。時々小さい組から迎ひに來られるけれども一向澄したもので……『喬たんは、オ、チイ組』……と言つて振

り向きもしません。何處で遊んでゐるも同じことであるのですから保姆も一向構ひません。他の幼兒も亦一向邪魔にしません。處で此先生なかくの剛情物で、兄さんの小心翼々たるのとはまた反對。それでも幼稚園中の面白い兒として評判なのは、外でもなく、此幼兒は普通の幼兒とは少しく變つて實に面白い氣骨兒だからであります。入園當時は非常に皆さんを困ませたもので、お氣に入りのサヨヤ（女中の名）に附着いたがり、何でも自分がこうと言ひ出したら、誰が何んと言つても屹度自己主張を遣り通します。それが又却々執拗なので大抵な意志の弱い者では負けてしまひます。泣き出しても、怒り出しても、半日はおろ

か一日でも遣り通して居ます。之は大方サヨヤの根氣負けが喬たんの我意を満たしたに起因して居るらしいのです。なせなれば兄いさんの云ふにはお家でも此通りだから、何時もお父さまに叱られるのですよと。斯ういふ風でそれはくなくの手古摺り者ですが、奇骨がある位だから普通の幼児のやうに初めから猫を被ぶるやうなことはありません。入園直に地金を出して居るのです。ですから矯正は至極仕易いのです。私は最初の日にサヨヤに嚴命しました。自分で、モ、仕ないと云ふ迄は決して我意を通させることはならぬ。そして泣いてくそつくり返つて居るのを其儘放擲して置きました。我儘の矯正方は何時も之が第一手段です。それから第二の手段は賛辭です。つまり矯めたり賺したりと云ふので、右幼児の剛情は普通の幼児を扱ふ手段位ではなく、利き目がありません。してはならぬと云へば尙ほ爲ると云ふ具合で

一度一寸でも叱れば一日怒つて膨れて仕舞ふのです。倉橋先生の所謂本當にキカヌ子なのです。私は説話などをする時は随分お饒舌りをする方ですが間には小言の時でも何んでも余り多くの言ひません。それなら體罰を加へるかと言つて、それも殆ど仕たことがあります。それが此幼児に許りには二十年來初めて脊中を一ツ敲いて(但し音ばかり)放擲して置いたことがあります。其日は例の如く一日怒つて居つたのですが、これが矯正の糸口となつて、さあ段々と面白い良い兒に成つて來ました。それから喬たんと云ふものはキカヌなかに従順に服従をする。それで意志が強く、從て獨立忍耐も備つてゐるのですから、益々面白い氣骨兒になつて來たのです。喬たんは、さう云ふことをなさるのではありませんと云ふと『ハイ!』と力の這入つた、それで何處から出るともなし自然に潔い返事をする。亦其舉動が實に愛

らしい。これは本人其者に接して見なければ却々筆紙では形容が出来ません。又喬たんは雨が降つても槍が降つても未だ一日も休んだことがありません。雨の降る時は何時も兄いさんと二人限りで車に乗つて来るのですが、何時も幌の中で、がたん、ことんと言はしてゐます。眞面目に腰など掛けてゐたことがあります。二人で前後左右に動き廻つて居ます。それで幌の隙間から時々可愛い、顔を出しては覗いて居る。御機嫌の良い時は意味の分からぬ自作の唱歌を歌つて来る。偶々其唱歌を眞似る人があると、『喬たんの……、トード……ナイー』と言つて矯正してくれる。それが幾度教へて貰つても音階、間合が何時も同じに出来てゐるが不思議な位で、何を言ふのか少しも判りません。又この幼児は非常に想像の強い兒で何か突然思ひ出したことがあると、如何なる時と場合を構はず話しに來ます。時には眞面目に合槌でも打たうも

のなら、それからそれへと構造して話すが、無論聯絡はついてゐまん。それを何にを話すにも接續詞と云ふものが少しもありません。『喬たん、チノー、お花見、あつた、』はこの兄の十八番で、初のうちは通辯なしではなかく判りませんでした。時々兄いさんに聞いて見るけれども兄いさんにも判りません。果て困つた、お家では何時も誰か通辯をなさるのですかと、聞いて見ましたら、兄いさんの返事が又面白い。『喬たんの話しはお父——さまにも、誰——にも判らないのだ。』それでこそ吾々は無論判らないのだと大笑ひしました。それでありますから、喬たんは時々自分一人にしか判ら無い話しをしてゐることがあります。又喬たんは大きい組で説話などが初つて若しか自分に判らないことになつて來ると、ソロ／＼退屈まぎれに方々へ出懸けて來て、まんべん無く惡戯をします。机の下を潜つたり、皆さんの脊中を敲いたり、机

の上に腰をかけたり、彼方の隅でこと／＼此方の隅ではこと／＼と遣り出す。それでも別に皆さんから怒られたことは無いが、お話しが佳境に入つた時に余りこと／＼遣り出すと『喬たん／＼小さいお組に往つてらつしやい』と他の幼児から言はれると、慌てゝ自分の席に付て頼杖をついて澄し込む、其態度の滑稽さは實に形容仕様がありません。又時に依て話しの一端でも耳に通じたものなれば幾度でも自分の氣に濟む迄繰返して聞く。例へば『喬タン、トコ、來タ、』『喬タン、トコナイ』『喬タン、見タ』『デント、ゴ、キツタ、喬タン、ツヨイ、タイドーブ』『電車がゴロ／＼とゐつたけれども喬たん強いから、あぶなくない』と又喬たんは變りものの、剛情だけあつて如何なる六ヶ敷いことでも一度は必ず一人です。例へば便所に行くことでも、お辨當を片附ることでも、靴を穿くことでも、手細工の様なことでも何んでも

初めから自分に出来ないとか判つて居つても必ず『喬たん、ひといで』を言ひ出す。時々大きい組で書描きが初まると、喬たんも一所になつて紙と鉛筆を持ち出して書を書いてをる。何を描いて來かしらんと、待つてゐると何枚でも紙のあるだけ、大きな文字を一つづゝ描いて持つて來る。喬たんにもつと外のものを書いてくれと注文いたしますとかぶりを振つて笑ひを湛へて『喬タン、デュー文字、喬タン、デュー文字と』言つて何時如何なる時でもこの十文字を描いてくれるのです。又喬たんの一番愛らしい時は双の頬に壓をへこませて笑らう時と、時々兄いさんが脇を傷めて休園する時に喬たんは、たつた一人で來てそれで何時もの自分の席に這入つて大きい者を相手に大人しく遊ぶで機嫌能歸へります時に車の上でも兄いさんらしい口を開き／＼『オイー、チミ、喬タントコニ來タマイ』といふ時、又喬たんの憎らしい時は

目を三角にして強情張つて怒る時。又一番哀れなことは喬たんは大きい組が好きだけあつて余つ程意氣が投合しなければ自分と同年の者とは遊ばない。で、兄いさんの跡許り逐つてゐる。所で兄いさんが遊びに興が入ると喬たんは時々オイテクボリを喰はせられる。すると喬たんはぼかんと立佇んでうらめしさうに眺めてゐる。其時に「お兄いさんは」と聲をかけると、何んの意味も無く、無論涙も出ては居ませんが『チゲタン(兄の名)アトバナイツテ(遊ばぬ)』とじつと其人の顔を視つめてゐる。「アラ……サウデスカ」と云ふと『エ、!』と何んに喩へやうも無い愛らしい聲を立て、返事をするのです。又喬たんの一歩滑稽なことは大きい組が全速力を出して替るゝ徒歩競争や障礙物競争などをして居る時に、喬たんも其中に勝手に雑つて勝手に一人で競争をしてゐる。合圖も一人で『テ、ニー、タン(一、二、三)』と言つて、それで

一人で駆け出して行くのです。兄いさん連が三度も競争を繰り回へす時分に、やつと向へ着て何にか拾つたり、彼方此方を見物したりしてやゝ暫してから出發點に戻つて來ます。それでも時々兄いさん連が來ては忙がしい中で息を切らして、喬たんは小さいから、此邊からでよしと言つて履の先で線を付けて呉ると今度は喬たん自分の勝手に思ひ附た處で無暗矢鱈に自分の履の先で線をつける眞似をして亦『テ、ニー、タン』と言つては飛んで行く。又其先きで思ひ出せば又其通りに行つてゆく、そして二三十分も経つた頃漸く出發點に歸へつて來ます。それで例の嚢をへこませて得意然と一人喜むで跳て居ます。

# 兒童救急手當法 (三)

醫學士 藤井秀旭

## 出血

出血の場所によつて鼻出血、咽頭出血、肺出血等を區別しますが、茲には唯鼻出血即ち鼻血のお話を致します。

子供には、いろいろな原因で鼻血の出ることが屢々あつて、其の手當に困ることがあります。

鼻血には(一)局所的と(二)全身的との二つの場合があります(一)は鼻に故障が起きた爲めに血が出る場合、例へば指で鼻をかくとか、鼻を打ちつけたとかいふ場合で、(二)は血友病、萎黄病、百日咳、麻疹、猩紅熱、腸窒扶斯、氣壓の變化等に原因する者であります。婦人にあつては月經代償として鼻血が出る場合もあります。鼻血の多くは鼻

の中隔から出る血であります、中隔は俗に鼻の障子と云つて居る所であります。その他、嚏をした時であるとか、精神感動が原因になつて出る時もある、精神感動による場合の如きは、一度止つてもまた感動すれば、また出て来るもので、これは頭の方へ血がよつてくる爲めであります。鼻血は量多く出ると、眼まいがして、眼火開發といふように、眼の前に火がちらついて見えだんと苦しくなつて來ます。

## 其手當

恁ういふ場合には、先づ子供を安靜にし、頭を高くして寢させ、兩手を高く上げさせて置く。大體の場合には、これで治るものであります、尙止



らない場合には、冷水に酢、或は明礬を加へたもの、(凡そ水五合に明礬一茶匙)を懸らせ、綿を小さく丸めたもの、即ち醫者で云ふ綿球を鼻腔へ填める。若し氷があつたならば鼻を冷すのは最もよい方法なのであります。綿球を作るには、清潔なる綿を小さくまるめて「アドリナリン」をつけて鼻腔に填めるのであります。

若し鼻血が鼻と咽喉との境目から出るといふような場合には、逆も素人には手當が出来ませんから、醫治を受けることが必要であります。

月経代償の場合で前に婦人科の病氣が原因して居ない時には、其の儘にして置いて差支がありません。たい足を温める位が其の手當であります。

嘔吐

この原因には、いろいろありますけれども、通常は食べ過ぎ腦及び胃腸に故障のある場合に催すもので、子供は百日咳の時によく起る。

この場合には成るべく食物や湯茶を與へないようにして口渴には氷又は番茶を冷くしたものを與へ、又は「セルテル」水を吞ますのであります

發熱

子供の體に熱の出た時には、頭や胸に冷い濕布をする。そして十分か十五分位で濕布を取り換へる。尙熱がさめない時には、四十度乃至五十度位のお湯に入れて、水を項からかけてやるのであります。これは肺炎の手當として、よくやる方法であります。素人は熱のあるのに、お湯へ入れた水をかけてたりして、反つて悪くなりはせないと云ふ懸念を持ちますけれども、決してそうではないと云つて居ります。若し心臓が悪くなつて來たような時には、玉露コーヒ等を與へるのがよいのであります。

異物

異物とは、人間の身體以外のもの、例へば石礫であるとか木片れであるとか其の他の物質を總稱した言葉であります。かういふ障害物が吾々の體內へ入つた場合には、その爲めにいろいろな害が起つて來ます。其の時の手當に就いて一通り申上げて置き度いと思ひます。これには子供が自分で入れた場合と、自然に入つた場合とがありますけれども大體次のように區別して説明する方が便宜かと思ひます。

第一は鼻腔内へ異物の入つた場合であります。

子供が豆や小石を持つて遊んで居ます時に、よく鼻の腔へ入れるもので、大體は右の鼻へ入れますそれは右の手に持つからであります。この時には紙撚を作つて、子供の鼻腔へさし込む。そうすると、嚏みをして其のはづみに異物が飛び出て來ます。

第二は氣道内へ入つた場合で、これには人さし

指を釣なりにして、咽喉の奥の方へ入れて、嘔吐を起さしむることにあります。

第三は耳の中へ豆を入れるとか、蟲が入つたとか云ふ場合で、其の時には耳が痛み、耳鳴りがして來て、むかつき、引きつけを起すようになります。この手當は、微溫の湯が「オリーブ油」を耳の中へ入れるのであります。

第四は眼の中へ入つた場合で、これが一番多いのであります。道を歩いて居る時であるとか、汽車に乗つて居て窓から顔を出した場合であるとかその他、眼の中へ塵の入つたと云ふ場合が澤山にある。かういふ場合には、眼が痛んで來ますが、殊に結膜囊の中へ入ると、血膜炎を起して眼が赤くなり。痛みも増して來ます。

此の手當としては、筆の尖きが、ハンカチをぬらして眼球を拭いて異物を取り、其の後へコカインをつけ、硼酸で冷すのであります。

第五は胃腸内へ入つた場合で、其の入つた異物が胃と腸との境にある幽門を通ることの出来るようなものであると、牛乳又はお粥、芋、キントン餅等を澤山に食べさせる。そうするとそれと一諸に異物が外へ排出されて來ます。

### 吃逆

吃逆は、壯健な赤兒、殊に母親の乳を呑んで居る子供に反つて多く出るものであります。胃腸其他の病氣の爲めに、知覺神經が刺戟された場合であるとか、殊に最も多く起るのは、横膈膜を壓しつけた場合に起ります。その他、心臓の中に水の溜る病、肋膜炎、腹膜炎等の爲めにも起ります。然し病氣がなくても突然起ることは前にも申した通りであるさういふ病氣でない子供が吃逆を起した時は、お湯か乳を吞ませればよく、少し大きな子供であると指で耳と鼻とを閉ぢて、お湯を吞ます。そうすると胃が膨張して、吃逆の原因たる横

膈膜の痙攣を止め、従つて吃逆が治るのであります。

### 中毒

中毒にはいろいろな場合があります。若し昆蟲類に刺された場合、就中、蜂に刺されたときには、針が身體に立つて居ないかといふことをよく確かめ、あつた時は能く之を抜き取つた後、硼砂精水を塗る、若し其の跡がついた時には、鉛糖水、錯酸礬土水で濕布をして置くのであります。

蛇に害せられた時、これは都會等には餘りありませんけれども、野原等へ遠足の出掛けた時には往々あることです。十分注意せなければなりません。噛まれた局部から、血が流れ出たときには、それを止めないで、其の儘にして置く、それは毒が體內へ廻はらないようにする爲めであり、又、心臓に毒が廻はらないようにする爲めに傷害の局部に近い中樞を手拭で固く縛つて置く。

そして局部へ礞砂精又は沃度丁幾を塗り置くのであります。又、酒を吞ませるのも一の方法であります。

犬に噛まれた場合、殊に狂犬に噛まれた場合には、往々にして恐水病といふ怖ろしい病氣に罹ることがありますから、十分の注意をして、其の犬が狂犬でないかどうかを調べて、若しそうであつたならば、直ぐに醫者の處へ行き、本當の恐水病である場合には、直ぐにバステウル注射をせなければ、其の爲めに生命を失ふに至るものであります。犬に噛まれた場合には、蛇に噛まれたと同じ應急の手當をして置いて、成るべく早く醫者の處へ行く方が安心であります。

第二に飲食物の中毒には(一)腐蝕中毒と(二)麻醉中毒との二つの場合があります。

第一の場合には酸類、礞汁、金屬等に中毒したとくに起るもので、此等の毒物の逢つた處は、酷く

焼けたゝれて、血便を出して非常に苦しみ胃が其の毒を排出しようとして嘔吐を催します。

此の手當としては、酸類を呑んだ場合には、弱いアルカリ即ち石灰水、重曹又は石礞等を吞まして礞汁を呑んだ場合には、酢或は梅のような酸類を吞ますのであります。若し水銀、綠青、重クロム酸加里等の金屬を呑んだ場合には、牛乳又は卵の白味を多量に吞ますのであります。

麻醉中毒は、阿片、モルヒネ、茸類、河豚、又は腐敗した魚を食べた場合で、其の爲めに身體が麻醉して人事不省に陥るか、強直性の痙攣を起し嘔吐を催します。この時には、其の嘔吐を助長して、其の毒を嘔き出さすようにせなければなりません。其の爲めには湯を多量に吞ませて羽根のようなもので、喉をさわる。そして直ぐに醫者を呼ばなければなりません。

疼痛

總て痛いといふのは知覺神經の刺激されたといふ證據であつて、子供が痛いといふ又は痛そうな表情をすれば、何處かに故障が起きて居るに相違ありません。けれども其の痛みが頭にあるか腹であるか、若しくは齒であるかと云ふ正確なる局部を指示するといふことは子供には出来ないものであります。又、両親等が平常頭が痛いといふと云つて居ると子供は他の場所が痛い場合も、頭が痛いといふ時がありますから、先づ其の場所を確めることをせなければなりません。勿論其の場所によつて其の手当が違ふからであります。

### 一、頭痛

頭痛の原因にはいろいろありますけれども、傳染病の爲め、酒を呑んだ爲め、血が頭によつた爲め頭の血が少くなつた爲め、睡眠不足の爲め等が主なる原因であります。その他、他の局部の疼痛に影響されて頭痛のする場合もあります。然し頭

痛といふ一の病氣がある譯ではないので、他の病氣の隨伴症狀若しくは其の分症として起るものがあります。

従つて其の手當も、頭痛の原因によつて迷ふけれども、一般に靜かにして眠らしめ、五官を刺激しないように注意して、頭を冷し、手足を湯の中へ入れ、項、足の裏、腓脛部へ芥子泥を塗り、或は下劑を吞ませるのであります。然しこれは一般の場合であつて、其の中で多血性の人の頭痛と貧血性の人のとは其の手當を違へなければならぬのです。多血性の人は多く血が頭へ鬱積した場合であります。顔の色が赤くなつて脈が少くなりあります。この場合には努めて頭を冷すことは勿論、頭に滯つて居る血を心臓へ歸しやるようにせなければならぬ。其れにはネーゲリ氏の方法と云ふので一番簡單であります。

其の方法を申しますと、頭痛になやんで居る

者を臥床の上へ正しく坐らせ、其の傍に懷中時計を置き、時間を正確に測ることが出来る様にして置きます。術者は平手を頬骨の所へ當て頭をつかむ。此の時拇指を耳の後へあたる様にして耳朶を押しつけたり、拇指を耳の中に突込まぬ様にしければなりません。術者は自分の肘を腋窩へつけ、力を入れて注意しながら頭を凡そ一寸ばかり上げる其の時間一二分間であります。頭痛が止んだといへは直ぐ止ねばなりません。貧血質の人の頭痛は心臓から頭へ血が届かないのでありますから、コ―と其の他の興奮劑を吞まします。然しこれ等は單に應急の手當に過ぎないので、頭痛にはいろいろの原因がある。其の本症を確めて治すことが大切であります。

## 二、齒痛

子供に一番多い病氣は齒痛であります、又、齒は一番病氣に罹り易い處なのであります。日本

の小學生の統計によつて見ても百人中で五十人までは蟲齒がある。これは未だ少いので、西洋では百人中九十人までもある。これは一に齒の養生の悪い爲めであつて、素人は柔かい物さへ食べさせて置けばよいと思つて居るようですが、それは反つてよくないことで、固い物をよく嚙むようにするのが齒の養生によいのであります。又、蟲齒は單に齒の痛みだけではなく、蟲齒から結核性微菌が身體へ入つた爲め、肺病を引き起すことでもある位ですから、これは十分に注意して、平常から齒の養生をさせなければなりません。

レーゼル氏と、イエセン氏と云ふ人が齒の養生に就いて十ヶ條の訓誡を述べて居ります。極めて適切な言葉であらうと思ひますので、同氏の言を引き來つて、齒の養生法の説明に供して置き度いと思ふ。

一、平生顔を洗ふよりも齒をお洗ひなさい。

二、子供には乳歯の時代から、歯の養生法を教へて置きたい。

三、甘い物や柔い物を過度に與へてはならぬ。

四、朝夕二回は必ず歯を磨け、朝よりも夕方はもつと大事に磨きなさい。

五、歯が健全であると云ふことは、身體の健全な證據で、歯が悪ければキツト胃腸が悪くなる。

六、歯を健全にするには常に掃除をせなければならぬ。其の楊子や磨粉を非常に注意せなければならぬ。

七、年に二度位は必ず醫者に診察を乞ひなさい。

八、若し悪い處があれば直ぐに治療なさい。

九、若し蟲歯が出来たら、直ぐ入歯をなさい。然し入歯をしても、生歯よりも自由でないから、痛むからと云つて直ぐに抜くのはよくない。

一〇、歯石のたまつた場合には直ぐに御取りなさい。

以上は平生から、養生法であります。これだけ嚴格に勵行して居ましたならば、大體は歯痛を起しません。

今、歯が急に痛み出した時の手當を少しく御話して置きます。それは、微溫湯、食鹽、硼酸、鹽酸加里等で嗽をさせ。これで治らなければ、溫菴法をやる。冷いものは其の當時はよいけれども直ぐまた痛くなりますから、溫い菴法をする。そして歯の根へヨチウムチンキをつけるこれで治らなければ醫者へ行くより外ありません。

### 三、咽喉痛

これは子供に餘程多い病氣であります、主としてジフテリアや、扁桃腺炎等に原因するものであります。若し喉に白い班點が出来て居れば、それはジフテリアで、若し赤くはれて居ると、扁桃腺炎であつて、物を食べると咽喉が痛むのでありますから、咽喉が痛むと云ふような時は直ぐに氣を

附けなければなりません。又、子供は此の場合に耳が痛いようにも云いますけれども、多くは耳ではない咽喉でありますから、これ等もよく注意をして直ぐに醫者へ行くことを怠らないようにすることが大切であります。

#### 四、腹痛

腹痛には、胃痛の場合と、痾痛の場合との二種があります。子供に多くは蛔蟲の生じた場合でありまして、學校などでは、よく机の角へ腹部を押しつけて苦んで居ります。其の時に眼を見ると、眼縁が黒くなつて居ります。その他、芋のよな瓦斯の出來易いものを多量に食つた時にも起ることが多い。これには溜つて居る瓦斯を腸から排出する手當をせなければなりません。兎に角腹痛の一般手當としては、溫石、濕布等の溫菴法で腹部を溫めてやることであります。

疳痛とは一般に云ふ癪でありまして、これは腹

痛の中でも殊に苦みが多いのであります。其の原因には種々ありますけれども、腐敗したサイダー其の他の清流水を呑む爲め、或は瓦斯の溜つた爲め、鉛の中毒の爲め等で、腸の痙攣を起すのであります。この場合にも腹部を溫め、若し出來ればリスリン灌腸をし若しくは五勺位の水で灌腸をする。それで治らなければ醫者へ行かなければなりません。疳痛の中でも殊に膽石疝は容易に治らない病氣で、醫者でもモルヒネ中射をして、漸く救ふと云ふ程に重症な病氣でありますから十分注意せなければなりません。

#### 五、胸痛

胸の痛いのにも、肋膜炎の場合と、肺の場合と肋間神經痛の場合とがあります。就中肋膜炎が一番多いので、其の徴候としては、胸が刺さる、ように痛く、そして胸苦くなつて來て、目まいがする。其の手當は水囊其の他の冷菴法を施するの



であります。こゝに注意すべきは、同じ胸痛でも肋間神経痛の場合のは冷してはならないので、温菴法を施さなければならぬ。故に胸が痛いからと云つて直ぐに冷したり温めたりしてはなりませんよく其の原因を確めて、然る後に適當な手當をする事が大切であります。

肺の爲めに胸が痛むといふのは、餘程重症になつて居るので、初期には先づないものであります肺の爲めに胸の痛む時も矢張温菴法をする。一般に肺は、其の患者の咳、痰を注意すれば左程傳染するものではありません。

これで内科的方法の大體の講習を終つた譯であります。最後に家庭なり學校なりで平常、備付けて置くべき薬品を一通り申上げて此の講習を終り度いと思ふのであります。

(一) ホツフマン氏液(アルゴール混合體)(氣附藥)

これは氣附藥で大人ならば、十滴乃至四十滴を

砂糖水へたらして與へます。

子供は五歲位乃至七歲位には大人の三分の二若し一度できなければ、もう一度與へるのも差支がありません。

(二) 礮砂精(氣附藥) これは嗅がせるのである

(三) 酢を二勺程、一日分の薬ビンに入れて、それを灌腸する。(氣附藥)

(四) 芥子泥(誘導劑)

これは前來度々話しましたように足の腓腸部に塗るので、頭や肺に寄つて居る血を、塗つた場所へ下げる爲めであります。芥子泥の製法は、普通の食匙で二三ばい程の芥子をなまぬるの湯で練り、それを麻か木綿の切れに塗つて、必要な局部へ貼るのです。然し子供には餘り濃いのはよくありませんから、適當に薄くすることが必要であります。

(五) 軟膏類

これにはいろいろな種類がありますけれども一番簡単なのは、硼酸軟膏とサリチル酸軟膏とであります。これは調剤したものを買つて來る方が便宜であります。

(六) 酒精 (消毒劑、鎮痛劑)

これには(一)エチールアルコホルと、(二)メチールアルコホルとの二種があります。第二の方は近來大變にやかましくなつて來た木精アルコホルと云ふ方で、これは使つてはならぬ。一般に藥用として使ふのはエチールアルコホルに水を半分ばかり混ぜたものであります。

(七) 齒痛の藥

これは醫者に頼んで調剤して貰つた方が安全であります。

(八) 重曹 (重碳酸ナトリウム)

これは胃の悪い時に吞む。

(九) 醋酸酹土水 (冷藥)

これは火傷をした場合など凡てひやしてよい場所へ濕布するので、備え付けて置く時は八プロセントに溶して置いて、使ふ時にこれを二プロセントにしてつける。

(一〇) 一%の鉛糖水 (冷藥)

これも(九)と同じく炎症の藥品で、冷し藥であります。

(一一) 二%リゾフォルム溶液 (消毒藥)

(一二) デルマトール

これは同じ消毒藥であるが、粉になつて居るのであります。

(一三) 絆創膏

(一四) 綑帶

(一五) ガーゼ

(一六) 吸入器

これは學校等では左程必要ではありませんが、家庭には是非備付けて置く必要があります。

## (二七)灌腸器

これは家庭には勿論、學校にも備付けて置くようにし度いと思ひます。

その他、幼稚園などで子供の使用する玩具、積木、石盤等は常に消毒することが大切であります。それには、

## (一)ホルマリン燭燭

室内消毒にはこれが一番簡單であります。其の燭燭は日本橋の三共合資會社で發賣して居ります。

## (二)リゾール又はリゾホルム

これは二つ共に、一プロセントの割合に水に溶して其の中へ玩具を三十分位入れて置くのであります。

これで、大體の講習を終つた都合であります。長時間の間熱心に御聽き取り下さつたるを感謝いたします。(終)

## 雜

## 録

## 神戸通信

(神戸幼稚園長望月くに子氏より)

米國カリフォルニア州ロサンヂェルスにて十七の幼稚園の總監督をして居られたレジョット嬢は今回支那福州に於ける新設幼稚園へ赴任の途中、神戸市へ立寄られ、市内二三園の參觀をせられました。其の節當市頌榮幼稚園長ミスハツの御盡力により十月十日、市内の保姆等集りて同嬢の御講話を聴くことが出来ましたから、その中要點を一つ二つ。

「私(レジョット嬢)が保育に従事して居ましたロサンヂェルスは教育に熱心な處であります。其の教育法は主として子供を戸外で遊ばす主義で、之れは日本から學んだのかも知れません。今日參觀した幼稚園で拜見したと同じく、一人の子供がそれ／＼責任を以て植物の世話をして、その美しい花の咲き出づるを樂しませて、又花を其の子の好きな友達に自由によつて上げるようなこともします。一時音律が盛に行はれました頃は、正しい音律に合はせたマーチとか、スキツピングの様なことが行はれましたが、それは幼稚園としては餘り六ヶ敷いといふことになつて、今日では廢されました無論極く簡單なことは今日でも致しますが」

「彼の地の幼稚園では朝の開會に挨拶の歌や、子供にお早う、太陽

にお早う、花もお早うの歌をうたひ、次に祈をします。其の時には目を閉づるのでありますが、指の間から目をあげて見て居る者などもあります。次に話、次に音律であります」

「風物は日本と同じ様なフレーベルの、式であります、日本のよりも大きくあります。私が始めて彼の地へゆきました頃は矢張日本と同じ大きさの小さい積木を用ゐて居ましたが、今は殆んど二倍の大きさになりました。板も同様に大きくなりました。大きい積木は、子供が互に區や家を造るに面白くあります。その他新聞紙や柔かき紙も經濟上から種々の形を作るに用ゐます」

「私の國では幼稚園と小學校との間に溝があります。幼稚園は自由でありますから小學校とは非常に隔りがあります。幼稚園から來た子供は活潑過ぎるとの評もあります。しかし、宜しく小學校の一年生の教育法を改良して活動的にするがよいと思ひます」

「彼の地ではモンテッソーリの方法が行はれて居ます。此の方法が全然幼稚園の方法にかはるとは思へませんが其の方法、材料を採用するは頗る宜しいと思ひます。

尙望月園長よりは同園に於ける机の研究についての有益なる通信を送つて下さいました。次號に詳しく御報道し度いと思ひます。――(編者)



### 本誌定價

一冊 郵税共金拾壹錢 六冊前金郵税共六拾錢  
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用一割増

### 購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に御送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

### 本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保姆紹介に關する件をも含む)の御手紙は  
東京市小石川區久堅町七十四番地フレーベル會事務所宛

會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、  
雨森劍宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下千駄  
谷八七八倉橋惣三宛

大正元年十一月二日印刷  
大正元年十一月五日發行

編輯兼發行者 東京府豐多摩郡千駄谷町大字千駄谷八七八  
倉 橋 惣 三

印刷者 東京市本所區番場町四番地  
井 登

印刷所 東京市本所區番場町四番地  
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市小石川區久堅町七十四番地  
フレーベル會